

## ドイツにおける近年の森林利用と景観変化 - ノルトライン・ヴェストファレン州ローマル付近を例に -

### Recent forest use and landscape dynamics in a forest located near Lohmar, northwest Germany

西城 潔<sup>1\*</sup>, 星 孝平<sup>2</sup>, 窪田麻理恵<sup>3</sup>

SAIJO, KIYOSHI<sup>1\*</sup>, KOHEI HOSHI<sup>2</sup>, MARIE KUBOTA<sup>3</sup>

<sup>1</sup> 宮城教育大学, <sup>2</sup> 宮城教育大・学, <sup>3</sup> ボン大学・院

<sup>1</sup>Miyagi University of Education, <sup>2</sup>Undergraduate, Miyagi University of Education, <sup>3</sup>Graduate student, University of Bonn

近年、ドイツでは薪炭採取その他の目的での森林利用が再び盛んになりつつある。ドイツのノルトライン・ヴェストファレン州ライン・ジーク群のローマル付近での観察によれば、過去数年の間にも森林利用と植生遷移の進行により景観が顕著に変化している。針葉樹林地は伐採により「ハイデ」と呼ばれる草本・低木の優占する荒地的景観へと変化し、次第に植生遷移の進行または植林によって広葉樹林地へと移り変わる。そのため19世紀末~20世紀初頭にかけて経済目的で植林が進められた針葉樹林地は急激に縮小している。それに替わって、広葉樹林は年々拡大している。ハイデは、針葉樹林地から広葉樹林地への移行途上に出現する植生景観と考えられる。ドイツにおけるこのような近年の森林利用と景観変化には、連邦政府レベルで進められている森林およびエネルギー政策が関与している。

キーワード: 森林利用, 景観, ドイツ

Keywords: Forest use, Landscape, Germany